

旧大連航路上屋

旧大連航路上屋は、国際的な海運拠点としての日本の歴史と、門司がその主要な国際港のひとつであったことを記念した建物である。かつては、大連（「旅順港・ポートアーサー」としても知られる）を経由してアジア大陸に向かう前の船が乗客を乗せる国内最終寄港地であった。1932 年以降、中国東北地方にあたる地に傀儡国家・満州国を日本が建国させた後、門司港は特に活気づいた。船は大阪から出航し、神戸で貨物を積み込み、最後に門司に立ち寄り、石炭やさらなる貨物や乗客を積んでから大連に向かった。

大連航路上屋の 1 階には管理事務所、貨物倉庫、検査施設があった。2 階には電信室、荷物検査場、ドックへの通路を備えた旅客待合室があった。20 世紀前半には、建物の前面は海岸から数メートルしか離れておらず、古い係留柱がかつて船が荷物の積み下ろしのために停泊していた場所を示している。

この鉄筋コンクリート造りの建物は 1929 年に建てられた。2 階デッキの上のアーチや、かつての正面玄関に並ぶ券売所の上の左右対称のブロックのような漢字など、ほのかにアール・デコの特徴が見られる。

建物の現在

現在、1 階は展示スペースになっており、門司を経由してアジアや世界各地に渡った船を含む、著名な日本船の模型が展示されている。また、蒸気船が世界中に旅行者や物資を運んでいた時代のポスターや広告など、多彩なコレクションも展示されている。また、大連市をはじめとした北九州市と友好都市・姉妹都市提携を結んでいる多くの都市を紹介する展示や、セーリング結びの練習ができる体験型展示もある。

松永文庫映画博物館

1 階の航海に関する展示よりも目を引くのが、初期のセルアニメで使われた古いマルチプレーンカメラだ。この 1970 年代の古物は、『となりのトトロ』（1988 年）や『劇場版ポケットモンスター2000』（2000 年）など、いくつかの名作アニメ映画の制作に使用された。このカメラは、隣の廊下にある 35 ミリ映写機とともに、松永文庫映画・芸能資料館のコレクションの一部で、メインの収蔵品は同じフロアの廊下の先にある。

この映画・芸能資料館は、門司出身の映画と映画記念品のコレクター、松永武（1935-2018）の遺産である。松永氏は 1997 年から自宅を開放して自身の膨大な量のコレクションを一般公開していたが、2009 年にはすべてを市に寄贈した。何千本ものフィルム、ポスター、撮影機材はこの建物に移され、2013 年から展示されている。他の映画愛好家からの

寄贈もあって、この映画史の貴重なアーカイブはその後 60,000 点を超えるまでになっている。その一部は関門海峡ミュージアムの「海峡レトロ通り」にも展示されている。